

博美第 189 号

淡野 哲

「感覚覚醒」を促す造形思索の研究～モノづくりの在り方・深層の記憶～

論文要旨

人々の気付き（感覚覚醒）を促す造形思索を主たる研究目的として、本論を展開します。特にその造形表現を「感覚覚醒補助具」と称し、その在り方を通して「道具」としての「有用性」、と「芸術」としての「無用性」、また「中庸なるもの」としての本来性とはなにかを表していきます。この「有用性」「無用性」の意味を本質的に論じるため、哲学的な視座に立脚し「物（モノ）」の存在を明らかにすることで、専門分野の垣根を越えた共通性を考察し「モノ」を生み出すづくり手の在り方を論じていきます。

序論ではこうした研究としての取り組みを醸成した問題点としての背景を考察し、本論において「モノづくり」に求められる思索について論じていきます。特に本論において気付きを促す「善」なる「モノ」を論じる上で、そもそもの「物」とはなにかを明確にするため、その拠り所として、哲学的な視座を用いています。これは本研究において、現代社会に観られる数値的由来に裏打ちされた“数の論理”を拠り所とせず、本来性を認識するために哲学的に「物」を論じるためです。そのためには「有用性」「無用性」を論じる必要があります、そこから現れる「本質性」や「付帯性」、「必然性」「恣意性」を独自の解釈による「有用性、無用性のモノのリング」によって表していきます。そこから「モノ」の持つ本来性とは、与える影響とは、責任とは、といったことを、経済の名の下に無尽蔵に生み出される「道具」や、無意識的に摸と生み出される「芸術」への自己も含めた「モノづくり」たちへの自戒の一縷となることを願い論じるものです。

本論を踏まえ、自身の造形思索としての取り組みとして「感覚覚醒補助具」を表します。この「感覚覚醒補助具」は平易に申せば「気付き」の装置とすることができます。真鍮やアルミニウム等によって表された機械的な表層は、人間らしさを強く拒絶するかのようですが、そこにこそ容易に現前としない見えざる真なる訴えかけが深層の記憶を触発させ、性急にではなく時間をかけ我々のところに気付きを呼び覚まさせると考えるものです。「補助具」という意味は、その装置の機能が十全ではなく、受容者との連関によって機能することを意味しています。この不可思議な「道具」から得られる形象や動きによって感覚の覚醒を促し、その気付きの差異が深層記憶を醸成させるとするところに本研究の「道具」としての本旨があります。そこでこの「感覚覚醒補助具」を「道具」と「芸術」との関わりを考察することで何が現われてくるのか、そこに結論を見出します。

内容構成

第1章

本研究である「感覚覚醒」を促す造形思索を醸成するに至る背景を「経済」中心の現代社会がもたらした様々な諸問題から考察し、特に「モノ」と「ヒト」との関わりの中から「モノ」のもつ影響力と可能性、そしてそれを生み出す「モノづくり」への求められる姿勢について論じていきます。

第2章

序論で考察された諸問題をいかにすれば「善」なる方向へ向かわせられるかを「モノづくり」の在り方において考察していきます。その取り組む過程として三つの異なる角度から哲学的な視座を通して論じていきます。第一に「有用性」と「無用性」、第二に「本質性」と「付帯性」、第三に「必然性」と「恣意性」を置き、論者独自の立体図を用いて論述します。特に、形而上の思索から「物」とはなにかを論じ、その過程において形而下への現実的な取り組みへと話を展開させていきます。

第3章

論者の造形表現としての取り組みである「感覚覚醒補助具」について論述します。前半では「感覚覚醒」への取り組みを論じ、後半では「感覚覚醒補助具」について、「道具」と「芸術」的観点から考察することによって観えてくる「気付き」を促す装置の本質について論じます。

第4章 結論

本論によって現われてくる論者の真意を総括します。